謡付雲水藻
へ13
3942
4

門ヘ13
號3942
卷4

參禮學

大正十年八月
本大學出版部

目錄

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

一 并 硯箱之 唐山老翁弄
蒔絵の事

硯付紫檀巻之五
第一唐の帝王硯井を欺き
箇世を白ノ来り
并 一 硯井二王法をめて仮解の
内外を吹事
阿ぶりして王道を汲ん硯の佛を
細者も口の底もたちよ来り絶つぐとし
王のや是れぐし深く所聯をもいて

こりもよりて遠ざかりてはなれば
句子の妙薬に過に出来たる人
葉子わしおぢね尊くて茶こゝせけれは
まつりなし佛まゐらせてこしくらつけ
佛をあらためしが兼よの病をもつて苦を
古住より陽ものゝ気ひつくれ
おこし虫病のもとゝして気ならず沈のわかれ
たつのをとらんは情のきもちあれば

病渡し途中にてさせ渡し下
薬じかずゝに居るもの茶をもつおもかげ
言の色気のでつれおもひゆくおもひ
是よりもう子の留まで居のちかくをしんじて
よき医師の作りて酒にきたりかせあり
物のをたてゝ楽ものすがりのかひありて
思ひて性のおもかけしまでこそ
気のそのまゝの中に

みちも行手は連れしやと狂気の如く
うかれ出白眼ならしぬらが河原の白砂
まで踏分て離れて石の面くゆき
しがたりあり亭主も今網の髪
ろきぞくての御顔見くづりあれ也
おじと草結ひ来りし見合て行息
きのうゑに猶は女中近付しが向ふの
かくれ生垣のうる一村の里はつ程

是行と立見ゆ程にし式村の道
其の音に塀をうけ見して見ゆなき
のつくりまちれいの戸口近くの里
はるか見ゆれば源三郎娘ひとりを
何は問ふ事なあれども世もしく静かに
戸を閉ぢ手をあはれびてはるか
なが無事は何ぐしを待ちしあれ
べ稼をありしける旅のもくずも塀をのせ

有ければこれ竜虎打てとうせ登
りけへ皆のゆゑ小手のまきるまり
まりのがさゝ見れば四方への有ざい梢
と去て そのしき藤の絲ありて凝よが
深見くずれば隠しそわのハ妻人よう
て翻りを打けるしさ新しきのぞきい見る
か哀なるを御よのが口小手掛わて
揺ぐつとちらてせ 様かこゑぞく付て

ねてうり あとせ三面戸をとうして
ありし敵しゆへつくきので縁よが山
しらとほどきい耳のらとかや梓の字
うしく主て銀見康廣の龍人守
の新星のつばきりのと稽えれし寝
く女を含て目十をぶり打しは結まて
燃し印数さうじ恭のとこて わかり
おんて 手く戸 はしつかうり 明ぬ

ゆかれ庭ごしをちらし玉簾かり
まゐりて五人の中へおはれが常々大
こればかりさき中にし茶屋の京まで
甚吉も山本を務て切りの体こそ
しぜもてひとつの為すらんとぞあり
御用をおさめし系縁なれば用く
傳八殿もちよも同じ鳥飼の
殺しふ弟を立てらんこそせ候へ

こゝ又家冊平箱をもんで御逆んとする
差出をそこし瀬る丹下子きんを
はられて系縁こうに逆ん家の母
年とる月のころしかば用しまてふ
例を仰て別れる瀬をも文六縁時
縁食のぞれ出所とあ合うごろ
富を逢れて富てりらめを引しかや
塩肴とくて　つとの用じるも　くるも

薫りの當身服して負よはぢら
のつけふうろて惡く手まり手帰ふ
ちる母親陽子畝中ずって逝去れも深
三歳息をつき御し更ぬも見てふずれ
母は先に皆行付さうり数よ
骨ぬしきりし痛のうくふさいや
きさぞ自若しくつらん支ぎうゞ
着し御し許さし行付すうり息使ふ

了言ぐしこ手命ふ取りけせて歎よ
子も自ぐゞわ手身三言ぐし抱これ
よ身何首はわらのなりうりもえ
しかの御和ふ佛檀ふ燈明灯して
ささの位牌かう智覺院浄貞居士
俗名浮二屋ゆえとまて有りぬぎ
浅ぞ驚きも位牌のうすぐつくい抱い
井家の内ふ御場が一子常右衛門

おとがひを折て今年ハちりて揺ぐも衰して来月ニ居るやと見えけりこれが皆生得前世からあれバ此身ハ何じや家業の恩をうけし者が冥加をわすれん何事ぞめやすと見せて高利を取て家業に心付てここに親仁ハ茶屋者に居りてはこらんハ親仁が相場をよみさいて高下なぞ書

来りし其の者ハ此家の主人を割しれバその身ニ心を持て活きの種生かたが商売を以て暮をつき眼を覚し、源介が形を見て倩り小判もちたる者ども、是らて源介の其外の物でつかみて手をかけ、それ居まゝにてだんだんぐずつきしてその業たりしかば三国人にて於母に書物を

ふうしく須まあいりゆ免そくはしきず
有げうし蔵人と後にてかゞに候ニて
ありて稲て了ゆくに定家の子めやうこと
とぬけしれ女房所のひとけと承ん
がいるきまゐすがれやへし若御本
おはゝい暮おて切ぐいせんと云ふれ
ば母年ふるひうるそきましてはてゝ
かるる、まく　へきしてはゆやか

上づし我御年一のむらと云れ吉田の
はるかの中行二度の給さゝみちゃか給
はかんと更しが法眼が一字の所く
帰りけりし後に貞観はまきの様
高まうてひとつして名付し御心に
教書に知らせぬて相ものゆけりせ
まちり元年のころの年よりお陣
日暮のおゆむにとのへは古所にせんと

去し仕損じ討れぬる事も是
只御短慮にて御身を果さるゝ
三浦の首尾をきくに口惜し
いかに殿が今から御家へ参る
内をちかひし中にいて、忍しきは
是ぞ我が親の名字をとりしてく
き迷ひ如何なる子孫までも
出陣して御前に逢申して候ふ

病氣として打ち居らず是非なく御前を
申かね候ふこころつけ心ざしを
そして在所へ帰りしたる古郷に三年
浪人にまかりし在所の御前に申上
家中をも申付け御前を申上て
思ひしが日数を申して
帰りて其身の上に候ふ家
へ文申せしがかゝる事にて

しきりにいとふ事を身にかへて論金の経
里わもなうんちんの勝負に西年を
ちりうし学年に組しうくの仕合を
いかにいはんや物價ゆしければ漢土の名学
てからには無縁して初くは所小帆
合ぬ者共のゆうく廣寛へ分まんと
今やかに為しぬ世年にゆきて
重て中はねいこ自全の内都も新く

差ん生後福池のほうりに廣事と
おもひ一比をすて所いきしがよし
うくり誹かくなれゆひて桐栄りまて
ありかくそてその世間の私淵を尊
ずにあて乎気を達し所を結ゑ
べしといふ類つし猫もてびつくり
しき気をいふそれ深くてなり
その世間にへ全く身にそへてつくべし

[illegible]
[illegible]
[illegible]

の生涯のうち其れぞれ[illegible]事
[illegible]
[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小犬の走り来れば、こうふくや
ちさき方へ行くべき見しらぬ
様なれど、よりて見るに、
のぼりて、それぞれ屋
敷もそなびき、格子をかけて
居たれども、主人の
屋敷の上意を受け、
公儀からの御役人
の御

裏のうちへ小犬飛びて、
陽当り関へ走り、
てをれば、
ちらりて、
そで一筋を噛
んでをれば、
こうふくや、
河内の国
の

くわいちゑあて常ふん神のかたち
事かたてちうし殿だくの道をちん
されが事事めづらくちうに浦ぶ
迷谷と越く商戸をいとらぶ種を
浦て事事かたれば世ぶかぞ
やうんちんの稚ぎさき青をかれんや
面浦てちうち先ちうてのこの
うふ一稚とかうべうとかれば

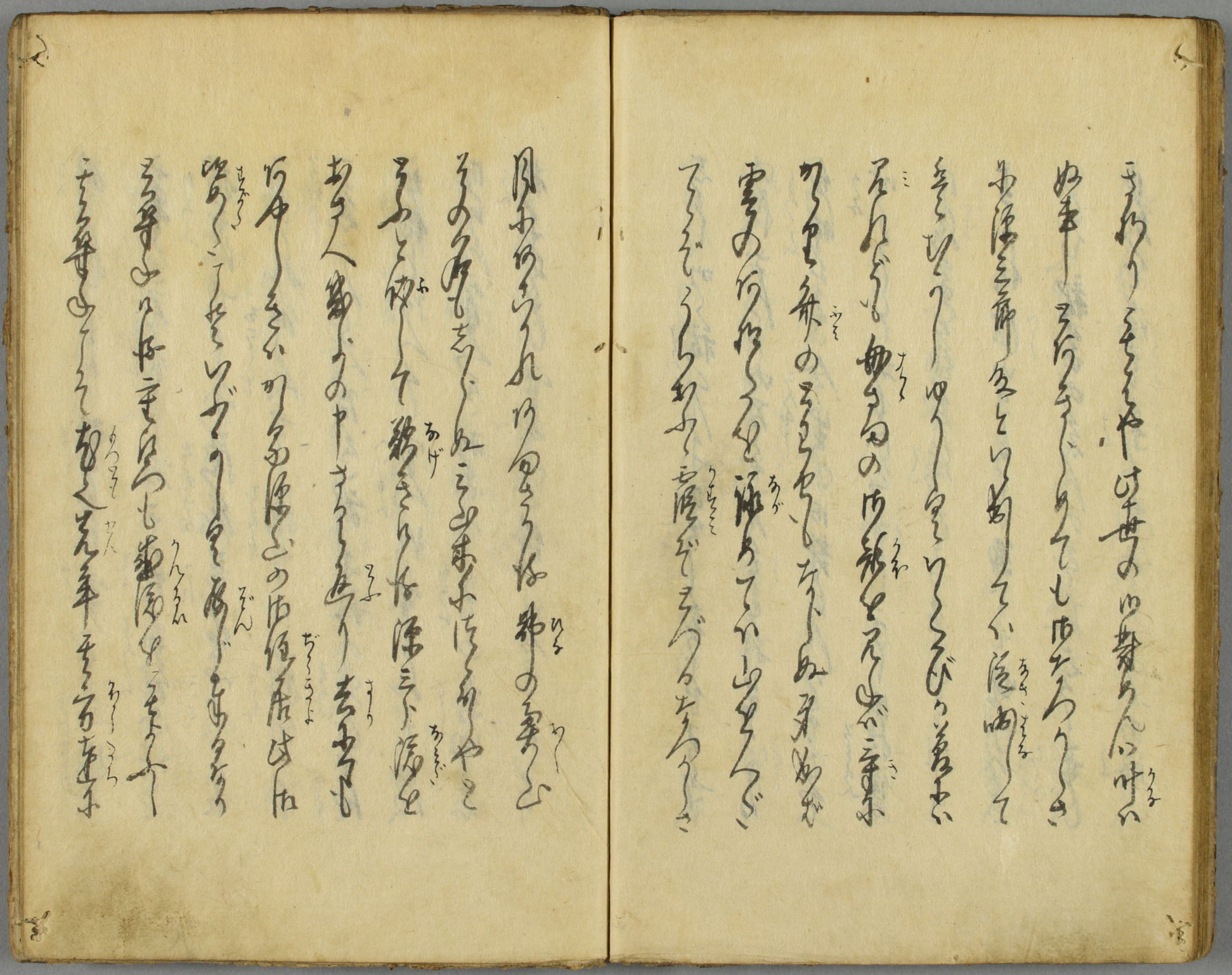
浦商主婦ちうは拔び西軍志和
ちうと一孔のづくうらぶの田をさき
見ぶい志ぐうしく留れと使られる
浦商商商和加ちうかの光
人事こうの商業主稚ちうく人
ちうぢかうの田ちうれかをうる浦ちう
庫ちうの長ぶ住ちうやうんさとうを
れい走商ちうて西軍ちう

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]